

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「とりあえず今夜は」

長野県
松本秀峰中等教育学校
高等部二年 三代澤 咲

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

幸せになる方法はたくさんあるが、ここに簡単な方法を幾つか記そうと思う。

雨が降る朝には窓を開ける。そして水の滴る音に耳を澄ませ、濡れた草木の香りを胸いっぱい吸い込む。夏の夜には冷たい水を持ってベランダに出る。月を見上げ、虫の声と遠い喧騒を聞いていると、ほんの少し酔ったような心地よい気分になる。秋の夕暮れには、いつもと同じ簡単な夕食を庭に持ち出して家族みんなで食べる。変に格好つけてジャズなんかをかけたとしても、なんとなく嬉しく、しんみりとした心持ちである。

「美しくも愚かしいことに思いを巡らす」——これは岡倉天心の著書『茶の本』で初めて出会ってから、私がずっと大切にしている言葉である。原文では *Tinger in the beautiful foolishness of things* と表現されるこの一節が代表する天心の主張は、日本人の伝統文化である「茶」に集約する。争いに乱れ荒んだ世にあつて、今こそ茶室に座り、面倒なあまたの作法のもとでたった一杯の茶を啜る美しく愚かしい行為に価値が見出されるというのである。

私は幼いころから、ことあるたびに「将来の夢」「今年の抱負」なるものを問われ、考えて生きてきた。目標を持つと毎日が輝き出すこともある一方で、時折「夢」自体が脅迫的なものとなり、息苦しく感じられることがあつた。もちろん将来を見据えコツコツと努力することとは、実力主義が追求された現代社会で時に必要なことなのだろう。しかし、将来のためと考えて今を犠牲にする姿勢が無批判に尊ばれるのは、あまりにも本質を見失ってしまったてはいないだろうか。本当にものごとには、意味や目的が存在しなければならぬのだろうか、あるいは存在しうるのだろうか。

数年前、私がまだ中学生であつたころ、私は日々テスト勉強に追われ、成績の順位揭示に怯えていた。当時は定期テストで良い成績を取ることが唯一の目標であつたがために、その結果に一喜一憂し、学ぶことの喜びには全く気がつけずにいた。高校生になると、少し心を通りかかると、学校に来られなくなったりしてしまふ友達が増えていった。私は医師になりたいという夢を抱いていたが、身近な人でさえ救うことのできない現実に愕然とし、どうしようもない無力感を覚えた。

そんなことに悩んでいた折、『茶の本』に出会った。忙しない日常のなかで、手間も時間もかかる、しかし日本の美意識の結晶ともいえる「茶」に幸福のかたちを見出した天心の主張に、私ははっとさせられた。意味も目的もない、ただその瞬間の美しさ、静謐さに歓びを見出し、それを同じ空間にいる人と分かち合うこと。それこそが自分を満たし、他者をも幸せにする一番簡単な方法なのかもしれない。

二十一世紀になつてもなお、ニュースから争いの気配はなくならない。混沌と苛立ちの影はむしろ濃くなつていくように思われる。目的のために何かを得ようとすることから争いが生まれる。意味を追い求めるからそれを見失つた時に絶望する。社会に憤慨する。矛盾に苦しむ。全てのものごとに価値や目的を求めすぎることは、時に苦しい結末を招いてしまうだろう。

私は『茶の本』に出会ってから、まずは手の届く幸せで自分を満たすことを心がけるようになった。冬の朝一番に新聞を取るときは、つめたい空気の中で深呼吸をする。誰かに小さ

な親切をしてもらった日は、忘れないよう日記につける。何気ない帰り道に春の花を見つけ、カメラを構えてみる。そんな本当に些細なことだが、ふとした幸せの欠片は注意していないと見落としてしまうことがある。それに気づき、自分で自分を幸福にすることができて初めて、他者に目が向けられるようになるのである。そしてそのような無理にでも自分を思いやることは、他者に対して気遣いをするのと同じくらい大切なことであると思う。あるとき私が自習室で勉強していると、受験期を迎えた先輩が私の前に現れて一粒のチョコレートを渡してくれたことがあった。私は感動すると同時に、彼女のそんな心の余裕や気遣いがどこから来るのかについて思いを馳せた。秀吉は激動の戦国時代にあつて茶を愛し、茶室によく足を運んだという。つい苦しい感情ばかりが浮かんでしまうはずの差し迫った境遇にあつても自分や他者に小さな心遣いができるのは、未来にのみ目を向けて苛立つのではなく、身近な幸せにも気がつくことができているからなのだろうか。

忙しい日々飲み込まれて、今この瞬間に溢れている「美しくも愚かしい」幸せに気付かずにいるすべての現代人へ。とりあえず今夜は、一杯の茶を片手に、夜風に吹かれてみませんか。